

実録・連合赤軍 あさま山荘への道程

—— 映画文学人生論

原作：掛川正幸 (2008年) 脚本：若松孝二
監督：若松孝二 (2008年) 掛川正幸
出演：遠山美枝子 坂井真紀 大友麻子
坂口弘 井浦新 撮影：辻智彦 戸田義久
永田洋子 並木愛枝 音楽：ジム・オルーク
森恒夫 地曳豪 ナレーター：原田芳雄

かつて日本にも革命を叫び、銃を手にした
若者たちがいた

若松孝二監督の映画『実録・連合赤軍 あさま山荘への道程』を観た。実は観たくないという気持ちも強かったが、自分が生きてきた過去をふりかえると、視線をそむけるわけにいかない。

あさま山荘への道は一九六〇年に始まったとナレーターはいう。昭和三十五年、日米安保条約改定が国会で強行採決され、一人の女子学生が反対デモで死んだ年だ。

かつて日本にも革命を叫び、銃を手にした若者たちがいた。感受性の豊かな若者たちは正義感が強く、自分は恋と革命のために生まれて来たとして、理想をかかげ、過激な行動にはしる。しかし、革命は実現せず、恋は実らない。ヒロインの遠山美枝子や妊娠八ヶ月の金子みちよなど十二人は仲間から総括され、リンチを受けたあげく、死んでしまった。

生き残った者はどうしたか。指導者の森恒夫は拘置所で自殺、永田洋子は死刑判決が確定した状態で二〇一一年に獄死、ナンバー3の坂口弘は死刑判決が確定、収監中、吉野雅邦は無期懲役で収監中、加藤倫教は懲役十三年の刑期を終える前に仮出所、板東国男は一九七五年、日本赤軍によるクアラルンプール事件超法規措置によって釈放されて出国。この時、坂口弘も釈放される可能性があったが、出国を拒否、収監を選んだ。



実録・連合赤軍 あさま山荘への道程

映画文学人生論

浅間山荘が警官に包囲された時、「俺たちの借りは死んだ同志たちにある。その借りを返そう」と坂口弘が言うのと、「何言っているんだよ、今さら」と当時未成年（十六歳）の加藤元久は肅清された兄、能敬の顔を浮かべながら叫んだ。「俺たちみんな、勇気がなかったんだよ！俺も、あんたも、あんたも、坂口さん！あんたも、勇気がなかったんだよ！」。

坂口弘は東京水産大学在学中、課外実習で水産労働者の劣悪な労働状態に接し、労働運動に人生を捧げようと決意した。永田洋子とは事実婚の関係にあったが、永田は森恒夫に接近し、坂口から離れた。連合赤軍ではナンバー3の地位にあり、あさま山荘たてこもり組のリーダーだった。

新左翼運動を誰一人として

総括をせぬ

不思議なる国

（坂口弘の獄中短歌の一首）

総括にもいろいろな意味があるが、若松孝二は映画で新左翼運動の総括をした。立松和平原作、高橋伴明監督の『光の雨』や佐々淳行原作、原田真人監督の『突入せよ！あさま山荘』に対して、「実録」を強調し、「それでも僕は、若い奴らを信じる」というメッセージを送っている。

自己本位総括をして冬の山